

ユースフォーラム「青年力でひらく日本の未来」

第1回 地域コミュニティにおける宗教の役割 (第三文明 2013年2月号より)

2012年10月23日、東京・新宿区内で、創価学会青年部主催によるユースフォーラム第1回が開催された。講師を務めた北海道大学の中島岳志准教授の基調講演の後、参加者で討議が行われた。

【講師】 中島岳志 [北海道大学准教授]

【出席者】

橋元太郎 [創価学会男子部長]

伊藤貴雄 [創価大学文学部准教授]

鈴木伸明 [群馬県社会福祉協議会]

プロスン・チャタルジー [インド出身] ほか

社会的包摂が求められる時代背景

橋元太郎 長びく不況や、非正規雇用の問題など社会的課題が山積している現代は、青年が生きづらい時代といわれています。日本全体が閉塞感に包まれるなか、池田大作SGI（創価学会インタナショナル）会長は私たちへ「創価の青年力で、人類史に希望の朝を！」と呼びかけてくださいました。

新しい希望の時代を建設するために、ユースフォーラム「青年力でひらく日本の未来」と銘打った連続の勉強会を開催することにいたしました。

第一回は北海道大学准教授の中島岳志先生にお越しいただきました。中島先生は地域コミュニティにおける社会のあり方、また宗教の役割との視点で、創価学会に対するご期待をお寄せくださっている方です。学会が戦後社会において果たしてきた「国家」と「個人」の中間領域としての役割にも注目しながら、「社会的包摂」のあり方について論じてくださっています。

中島先生との勉強会を通じて、私たち創価の民衆運動の目指すべき方向性などについて、ぜひ有意義な交流を図りたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

中島岳志 今、人間関係が希薄化し、あらゆる地域コミュニティが流動化しています。老人の孤独死や保護者の児童虐待などの背景には「アイデンティティ（自己存在）の承認」という深い苦悩が存在します。人生の意味や自分の役割が見えず、社会のなかで必要とされている実感がわからない点に問題の本質があります。

世代を問わず、あらゆる人々を社会のなかに包み込み、それぞれが人生の意味を感じ取れるような社会につくり直していく必要があります。これがソーシャル・インクルージョ

ン（社会的包摂）の概念です。

国家機能の一つに「富の再配分」があります。税金を徴収し社会的弱者に再配分する機能です。しかし再配分は何も国家のみが行っているわけではありません。これからの時代は「公共」の概念を広く考える必要があります。ドイツの思想家ハーバーマスが提唱したように、「市民による公共圏」をつくり出し、社会構造を強くしていくのです。たとえばNPO法人の活性化や「寄付」文化の浸透などがあるでしょう。

この寄付文化は優遇税制によるインセンティブ（動機づけ）だけではなかなか発展しません。インドもアメリカも寄付文化の中心は宗教団体です。信仰心といった宗教的な動機から寄付を行っているのです。

今後の日本のあり方を考えるとき、宗教団体が果たす社会的な役割は実に大きなものがあります。

日本ではセキュラリズム（政教分離主義）が強調されがちですが、インドのガンディーが主張したように、政教分離の本質は、「公共」から宗教を排除することではなく、すべての宗教を公共が平等に扱う点にあります。エンゲージド・ブディズム（社会奉仕の仏教）の観点から冷静な議論を深めていくべきでしょう。

ボンディングとブリッジング

伊藤貴雄 大学で「創価教育学講義」を担当しています。創価学会の牧口常三郎初代会長の偉大さは、宗教的な民衆運動によって日本社会を変革しようとした先見性にあると思います。「一人一人にモラルを確立できれば、法律の少ない、自由で風通しのよい社会をつくることができる。その可能性を宗教に見出したい」と語っています。法と道徳の調和を目指し、牧口会長なりの公共空間を国民の間につくろうとしたのだと思います。

中島 実は公共空間で社会的包摂を実現するためには乗り越えるべき課題が存在します。すべてを強い「絆」で包み込んでしまうと、個人に息苦しさを感させたり、同調できない者を排除してしまう場合があるのです。典型的な例が「ムラ社会」と呼ばれる閉鎖的な地域コミュニティです。

鈴木伸明 私は社会福祉協議会の活動に携わっています。社協は地域福祉を推進する団体です。大規模災害時には被災地とボランティア希望者の橋渡しを務めます。また仮設住宅になじめず孤立化している被災者に寄り添い、精神的なケアも行っています。今、中島先生がおっしゃったような難しさが被災地にも存在すると思います。

中島 インクルージョン（内包）にどうしても伴うエクスクルージョン（排除）という問題への処方箋を示したのが、「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」の研究で知られ

るアメリカの社会学者ロバート・パットナムです。社会関係資本とは、お互いが顔を合わせ、信頼に基づいて語り合い、合意形成をしながら意思決定していく人間関係全般を意味します。

パットナムはボンディング（接着）とブリッジング（橋渡し）という二つの概念を提唱しました。ボンディングとは会社・学校・地域社会・サークルなど、自分が所属する団体との強い「絆」を意味します。しかし絆には「KY（空気を読めない）」な人を排除するといった同調圧力が生じます。自分の所属組織のなかで立場が悪くなると世界が終わってしまいます。だからもうひとつのブリッジングという機能で、あらゆる組織同士に橋がかかった社会をつくり、個人が組織を自由に行き来できるようにすべきだとパットナムは考えたのです。

プロスン・チャタルジー 私はインドに生まれました。インドでは三千年前から続くカースト（身分階級）制度によって、結婚・職業・住居のすべてが決まってしまう。二十三歳で日本人の妻と結婚し、池田大作SGI会長の人間主義の哲学に触れてインドSGIに入会しました。

二十七歳のとき、就職のために来日しましたが、創価学会の座談会には年齢や性別や国籍を問わず、自由に触れ合う空間が存在します。私も、座談会に誘った私の友人たちも、座談会が一つのきっかけとなって、日本人との間の心の壁を乗り越えていくことができました。

「政治」「社会」「精神性」の三層構造を持つ社会を

（参加者からの質問） 国家と個人の間領域を担う地域コミュニティが継続的に発展するために、どういう心がけが必要でしょうか。

中島 私はパットナムのブリッジング機能を「ナナメの関係」と呼んでいます。タテ社会やヨコの交友関係を大切にしつつ、もう一本ゆるやかなナナメの人間関係をつくろうとの意味を込めています。

戦後の創価学会が、宗教活動を通じて、大都市のなかに低所得者層の居場所や活躍の機会を生み出した点に着目しています。いわば大都市のなかに「宗教コミュニティ」を創造したのが創価学会なのだと思います。

（参加者からの質問） さまざまな中間領域が存在するなかで、創価学会ならではの独自性とはどのようなものでしょうか。

中島 宗教団体が持つサステナビリティ（持続可能性）だと思います。

日本は「瞬間沸騰型社会」です。ポーランドの社会哲学者バウマンが「クローク（劇場の荷物預かり室）化した社会」と指摘したように、集団で劇場に参加している一時的な興奮状態のときのみ、社会貢献に関心を抱き、一時の熱狂が冷めるとたちまち忘れ去ってしまう。だからこそ宗教的動機にもとづく持続可能な社会奉仕が必要なのです。

（参加者からの質問） ホスピス（終末医療施設）でボランティアをしています。創価学会が地域に奉仕する宗教であるために留意すべき点はありますか。

中島 大震災後、避難所に僧侶が慰問に赴いたところ「こんなときに勧誘するのか！」「（死を連想するので）来ないでほしい」などと言われたそうです。このことは日本の仏教界全体が深刻に受け止めるべきです。

人間は他者の死に出会ったとき、大切な瞬間に遭遇しているのです。本当の「死」に出会った人間に対して、本物の言葉を発せられないことが問題です。

「死」という抽象概念を持つことが宗教の始まりだと思います。死という生命の有限性の発見と、その対概念となる無限の観念を手に入れる。ここに宗教の根源があると思います。

創価学会の皆さんは「友人葬」を通じて僧侶に依存しない葬儀のあり方を模索してきました。人間の死を皆で追想する活動をなさってきた。私はこの延長線上に何かを考えていきたいと思っています。

（参加者の発言） 学会員はいろいろなことに積極的です。たとえば登録型の「人材バンク」のように、学会の組織としてではなく、個人参加の形で社会奉仕する場が増えればいいなと感じています。

中島 私は三層構造の社会を理想としています。政治の領域、社会的包摂など人間資源を基盤とした領域、そして文学や宗教などの精神性を基盤とした領域です。実は、創価学会の皆さんはこの三つの領域をすべて持っています。これからは、三つの回路を活用してどのような新機軸を打ち出すかが大切ではないでしょうか。

橋元 貴重なご意見、大変にありがとうございます。今から百十年前、牧口初代会長が著書『人生地理学』のなかで、軍事的競争から経済的競争、そして人道的競争の時代へと推移していくことを予見されました。

二一世紀に入り、まさにそのような時代になってきたことを感じています。特に東日本大震災以降、若い人と話すと、社会貢献への意欲の高まりや、単に利益追求だけでない新しい働き方が注目されていることがわかります。

学会青年部として、人道的競争の時代にどのような貢献ができるのか。このような勉強会などを積極的に開いて対話を進めながら、しっかりと考え、取り組んでまいります。